

# 『搜神記』の中のぶいぶい

—「いぬ」の表象—

矢野光治

## 一 はじめに

先ず『搜神記』の版本について述べておく。

『搜神記』は、一般に志怪小説(注)と言われている。この書は、また『搜神録』、『搜神異記』、『搜神伝記』などとも称される。『晋書』本伝には三十巻本の存在が記され、『隋志』、『唐志』でも同様の記載がみられる。また、『隋書』『経籍史』、『旧唐書』『経籍史』では史部雑伝に分類され、『新唐書』『芸文志』では子部小説家類に編入されており、三十巻本となっている。これらの三十巻本は、のち宋代に散佚している。また北宋の『崇文書目』には、『搜神総記』十巻の名が記されているが、これは干宝作ではないと注記がある。この書も南宋以降に歴史から姿を消した。

現存するものでは、明末の二十巻本、四六四条、逸文三四条が最も通用していて、中世の説話を研究するための必須の資料となっている。中国の古書籍である『三国志』・『後漢書』・『世説新語』・『文選』注や、『芸文類聚』・『太平御覧』・『太平広記』中の引用説話は、すべて二十巻本系統によるものであることから二十巻本が正系と考えられる。この他、稗海本・広漢魏叢書本・説庫本等の八巻本、唐代以降の通俗的なテキストをもとに作られたとされる勾道興の敦煌本がある。また八巻本は、敦煌本と重複する話などを含み、魯迅は唐宋以降の仮託とみて言及していない（『古小説鈎沈』）。つまり、この両者は干宝の作ではないとされる。本論でも二十巻本による『搜神記』の怪奇譚には、多くの動物が出てくる。使用例の多い順に示せば、「馬・いぬ・蛇・牛・龍・羊・狐・ブタ・虎・狸・鰐・猿・鼠・亀・雀（黄雀）…」など、枚挙に遑がない。この他、魚類・鳥類・虫類など、その使用例のジャンルも多岐に及ぶ。このう

ち、最多使用例の「馬」は五十話、本稿で述べる「いぬ」の説話は三十話ある。この数には当該動物単独での出現だけでなく、他の動物との混用も含んでいる。小論では、『搜神記』の著者の経歴や同書を書き著した経緯を説明しながら、同書の中の「いぬ」の怪異譚を読み解き、特に当時の人間や社会との係わりについて考察する。

## 二 著者干宝と『搜神記』を著した経緯

著者干宝（寶）の経歴については、『晋書』「八二」に以下のような記述が見える。

干寶、字は令升、新蔡の人なり。祖は統、呉の奮武將軍、都亭侯なり。父は榮、丹楊の丞なり。寶少くして學に勤め、書記を博覽し、才器を以て召され、佐著作郎と爲る。杜弢を平らぐるに功有り、爵を關内侯を賜る。…家貧なるを以て、求めて山陰の令に補せられ、始案太守に遷る。王導請ひて司徒右長史と爲し、散騎常侍に遷る。『晉紀』を著す。宣帝自ら愍帝に迄ぶ五十三年、凡そ二十卷、之を奏す。其の書は簡略、直にして能く婉、咸な良史と稱す。

性陰陽術數を好み、思ひを京房、夏侯勝等の傳に留む。…

寶は又た『春秋左氏義外傳』を爲り、『周易』『周官』に注すること、凡そ數十篇、及び雜文集ありて、皆な世に行はる。

それによると、干宝（二八六年？～三三六年）は、字を令升といい、新蔡（現在の河南省新蔡県）出身である。年少より勤勉で學問に熱心であった。博覽強記で西晋の懷帝の時に才覚を認められ、著作郎（朝廷の歴史書の編集を司る官）に任ぜられた。愍帝の代に杜弢の乱を平定した功績により、関内侯の爵位を授けられる。その後、北方騎馬民族である匈奴左部の劉曜が晋の都長安を攻撃して陥落させた。愍帝は降伏し西晋は滅亡する（三一六年）。この時期に異民族により故地を奪われた高級官僚・豪族はこぞって中国南部に移住した。これを「南渡」と呼ぶ。西晋の皇族である安東將軍司馬睿が即位して東晋を建国した（三一八年）。これが晋中興の祖といわれる元帝である。その元帝を補佐した王導（二六七年～三三〇年）は、晋朝に反乱を起こした大將軍の王敦（二六六年～三二四年）の従兄弟にあたり、いったん賊軍に敗れたが、ついには反乱を鎮圧して、次の明帝・成帝の代に宰相となった。

その王導が中書監の時に、干宝は国史編纂に携わり、『晉紀』二十卷を奏上する。この功績により、「その書は簡素にして真摯、しかも妖艶さを合わせ持つ。衆人ごとく優れた歴史書であると賞賛した」との評価を得た。また、家計逼迫のため、人に依頼して山陰の県令の地位を得て、さらに後には始安の太守となった。王導の推挙により、司徒長史、散騎常侍（天子の御幸に騎馬で同行する散騎と、宮中に仕える使徒の兼務）の位に上る。その著者には『春秋左史義外伝』・『百志誌』・『周易』の注・『周官』約数十篇・『干宝集』があるが、すでに散逸している。

また『搜神記』を著した経緯についても、同じく『晋書』「八二」に以下のような記述が見える。

寶の父先に寵する所の侍婢有り、母甚だ妬忌す。父の亡するに及び、母乃ち生きながら婢を墓中に推す。寶の兄弟年少にして、之を審らかにせざるなり。後十餘年、母の喪に墓を開くに、婢の棺に伏するや生くるが如し。載せ還るに、日を経て乃ち蘇る。言ふ「其の父、常に飲食を取りて之に與へ、恩情生くるが如し」と。家中に在りての吉凶輒ち之を語り、考校するに悉く驗あり。地中も亦た悪しと爲を覺えずといふ。既にして之を嫁がしめ、子を生む。

又た寶の兄嘗て病みて氣絶し、積日冷たからず。後遂に悟めて云ふ「天地の間の鬼神の事を見たり。夢の覺むるが如くにして、自ら死せるを知らず」と。

寶は此れを以て、遂に古今の神祇の靈異、人物の變化を撰集し、名づけて『搜神記』と爲す。凡そ三十卷なり。以て劉惔に示すに、惔曰く「卿は鬼の董狐と謂ふ可し」と。寶既に博く異同を採り、遂に虚寶を混す。因りて序を作りて以て其の志を陳べて曰く、先志を載籍を考へ、遺逸を當時に収むと雖も、蓋し一耳一目の親しく聞き觀る所に非ざるなり。亦た安んぞ敢へて實を失ふ者無しと謂はんや。衛朔國を失ふや、二傳其の聞く所を互ひにし、呂望の周に事ふるや、子長其の兩説を存す。此くの若きの比類、往往にして焉有り。此れ従りて之を觀れば、聞見の一にし難きこと、由來尚し。夫れ赴告の定辭を書し、國史の方策に據りてすら、猶尚ほ茲くの若し。況んや仰ぎて千載の前を述べ、殊俗の表を記すをや。片言を殘闕に綴り、行事を故老に訪ね、將に事をして迹を二にせず、言をして異塗無からしめ、然る後に信と爲さんとするは、固より亦た前史の病む所なり。然り而うして國家は注記の官を廢せず、學士は誦覽の業を絶たざるは、豈に其の失ふ所の者、小さく、存する所の大なるを以てならずや。今の集むる所、小さく、存する所の者大なるを以てならずや。今の集むる所、設し前載に承くる者有らば、則ち余の罪に非ざる

なり。若使し近世の事を採訪し、苟も虚錯有らば、願はくば先賢前儒と、其の譏諒を分かつた。其の著述に及びては、亦た以て神道の誣らざるを明らかにするに足るなり。羣言百家、勝けて覽る可からず、耳目の受くる所、勝けて載す可からず。今粗ぼ以て八略の旨を演ぶるに足るを取りて、其の微説を成す而已。幸はくは將來の好事の士、其の根體を録し、以て游心寓目して、尤無からしめる有らんことを。

この他、この書を著した理由を述べた資料に自序がある。自序の部分は、『搜神記』（平凡社）の訳を引いておく。

搜神記原序 晋 散騎常侍（散騎省朝廷の奏事を管掌する役所である散騎省の長官） 新蔡（于宝の出身地、今の河南省にある） 于宝 字令升 著

先人の記録を書物でしらべ、世に語り伝えられていることを収録してみると、それらのことはただ一人の人間が見聞したことではない。このようにたとえ大勢の人が見聞したことで、そのすべてが真实性を失っていないとはけつして言えないのである。かの衛朔（春秋時代、衛の恵公。朔はその名）が君主の地位を失ったことについて、『春秋』二伝の『左氏伝』と『公羊伝』、『穀梁伝』との何れか）あいだには伝聞に食い違いがある。また、呂望が（太公望のこと、姜叔牙、呂尚ともいう。周文王に見いだされ、その知謀で武王を助けて周の建国に貢献する）周に仕えるに至った経緯について、司馬遷は二説を書きとどめている。このような例はしばしば見られることである。

このような観点から考えると、目や耳で見聞したことによって真実を伝えるということは、昔から困難なことなのである。だいたい一定の形式にのっとった赴告（『春秋』を指す）の記録や、国家の歴史を（『史記』を指す）記録した書物によってさえ、こういうありさまなのである。

まして、千年も昔のことを、今日から見て記そうとすれば、珍しい習俗を記録し、部分的に残存している書物から片言隻句を拾って綴り合わせ、いろいろな行事を古老に尋ねて、事実誤りの無いようにし、記録に食い違いの無いようにせねばならない。しかるのちに、信頼のおける記録となるのであるが、昔から歴史を記す場合には、この点に苦労したにちがいない。記録と言うものは、このようにすべてが信頼できるものではないのに、国家においては歴史編纂の役人を絶やさず、また学者は書物を読む

勉強を綿々と続けて来たのはなぜであろうか。それは、伝えられる記録は、なにはともあれ、失われた部分は少なく、真実を留めている部分が多いと判断されるからなのである。

いま私がここに収録したもののなかに、先人の記録に記載されている誤りを、そのまま受け継いでいるものがあれば、それは私の責任ではない。また、たとえ最近のことを採録した場合に、偽りやまちがいがあつたとしても、同様の欠点は昔からあつたものであるから、これに対する非難は、いにしへの賢人や前代の学者たちと分け合つて受けることにしたい。

しかし、私がこの書において述べることは、ともかく神道（超現実的な摂理）が虚妄なものではないということを通すことに足るものであろう。これまでにも、多くの人びとによつて述べられたさまざまの記録があるが、そのすべてに目を通すことはとうていできないし、また見聞したことすべてを、いちいち記載するわけにもいかない。そこで、八略の趣旨を説明するのに役立つと思われるものを、雑然と取りあげてこの拙著をものしたのである。

もし将来、好事家が現われて、私がこの書で言わんとした根本義を心に刻み、その点に思いを寄せ、眼を向けてくれて、私がおのちの世に残した罪を消してくれれば、ありがたいことである。

干宝は、幼少期から学問を好み、万巻の書を博覧し、晋王朝に於いて著作郎（朝廷の歴史書の編集を司る官）となる。のちに国史編纂に携わり、『晋紀』二十巻を奏上する。つまり、干宝は東晋を代表する歴史家の一人である。立場上、王朝所管のあまたの書物や記録に触れる機会が多々あつたであろうし、歴史家として過去の事柄の事実を祖述する重要性も自然と体得している。一方干宝は、陰陽術数にも興味を持ち、『周易』に付注した易学の専門家でもある。事の事実を忠実に記載する歴史家としての立場、未来を洞察する易学の力量とを兼ね備えた干宝こそ、志怪小説を書くのに最も相応しい人物であると思量できる。

この書を著す大義としては、その自序で「私がこの書において述べることは、ともかく神道（超現実的な摂理）が虚妄なものではないということ明らかにするに足るものである。」と言明している。神道については、『周易』「観卦象伝」の中で、以下のように定義する。

天の神道を観るに、四時忒はず。聖人は神道を以て教を設けて、天下服す。

【天道の至神なるを仰ぎ観て、四時の運行がいささかも狂いがないことを黙識する。

聖人はこの天の天道を体して教えを設けるので、天下の人々は心服するのである。】

〔新釈漢文大系 周易 上〕 明治書院

ここに、易学研究者としての干宝の面目躍如たるものをみてとれる。つまり『捜神記』とは、「神（道）」を「捜」し求めた「記」録の書物であると同時に、歴史の「記」録でもある。

またこの書の著述の動機づけとして、干宝の身近な人間の神秘的体験からの影響もある。干宝の父親の愛妾を、父親が逝去して弔った際、嫉妬していた母親が、父と共にその愛妾も墓穴に閉じ込めてしまった。十数年後、母親を父の墓に弔った時に墓穴を開けると、その愛妾はまだ生存していて、吉凶を言い当てる霊感を具有する。のちにこの愛妾は、結婚して一子を設ける。もう一つは、干宝の兄が、病で亡くなった際のできごとである。兄は死後から蘇生する。その兄が、あの世で見た人間には見ることができない鬼神の姿を語ってくれる。なお、兄は自分が死んだという意識はなかった。これら超常現象を身近で体験したことが本書編纂の動機となったと資料は伝えている。

### 三 『捜神記』の中の「いぬ」(注四)

#### 1 【卷三】 許季山の易断（51）・臧仲英遇怪

人物… 臧仲英。官は侍御史（宮中の侍従職）から、後に太尉長史（国家の武事を司る長官）・魯相（魯国の大臣）へと出世する。  
 占卜… 許季山。汝南（河南省）の人で、卜占の術をよくした。『後漢書』卷八二下「許曼傳」にその経歴がみえる。

時代… 漢

場所… 右扶風（陝西省の西部）

記事… 臧仲英の家庭内で、用意したお膳が汚れたり、炊飯時に釜がなくなったり、刀剣や竹弓が勝手に動きだしたりする怪異な現象が起こる。さらに衣類を入れたつづらごと燃えるが衣類だけが焼ける。その後も女性たちの鏡が紛失したが、

2

- 【卷三】 ふしぎな猿（60）・淳于智筮病  
人物… 張劭、字は元伯、後漢の人。官は護軍將軍。  
占卜… 淳于智  
時代… 漢  
場所… 汝南（河南省）

後日わけもなく庭に投げ出されて返却される。孫娘もいなくなったが、二・三日後に便所の中から泣き声がして発見されるなどの怪異現象が続く。そこで許季山に占ってもらい、黒の老犬を殺し、召使の「益喜」を解雇するよう指示を受ける。それに従うと、その後はあのような怪異現象は無くなり、臧仲英が出世をする。

いぬ…  
青狗①・狗①

出典… 『太平広記』三三九、『類説』七の『風俗通義』「怪神第九」

特記… このことに関連する記録として、『風俗通義』「怪神第九」には、以下のような記載がある。

謹んで考えますに、魯の大臣右扶風の臧仲英が侍御史になった時、家族が食事の準備をし、膳を整えていると、突然汚いごみ土が飛んできて、食膳を汚した。また、ご飯が炊き上がろうとした時に、釜が見えなくなった。そして武器は勝手に動き出した。また、火が勝手に籠から出て、衣服や物を焼き尽くしたが、籠はもとのままであった。そして女や端女が皆鏡を亡くすという不思議なことがあり、数日後、堂の下から庭に投げ込まれ、人の声で「お前の鏡である」と言った。また、三、四歳の孫娘が、いなくなり、捜したが見つからなかった。二、三日すると廁の糞尿の中で泣いていた。このようなことが度々起こった。

汝南に許季山という者がいて、もともと筮竹による占いを得意としていて、「あの家には老いぼれの黒い犬と、中庭に御者の益喜というものがいて彼らと一緒に不思議なことを起こしているのである。本当にこれらのことを亡くしたいのなら、この犬を殺し、益喜を郷里に帰してしまいなさい」と言った。その通りすると、不思議なことはびたりと止んで全く無くなり、仲英は大尉長史となった。（『風俗通義』 明德出版社）

記事… 張劭の母親が重病に罹り、淳于智に占ってもらう。智は、西方に行き沐猴を買わせて、母親の腕に繋ぎ、看病者に沐猴を叩かせ、三日間泣き続けさせた後、解放するよう指示をする。その通りにすると、沐猴は門外で犬に噛まれて死んだ。母親の病は快癒した。

いぬ… 犬①

出典… 『晋書』卷九五「淳于智伝」

## 3

【卷三】ぶち犬の効験(68)・严卿禳灾

人物… 魏序

占卜… 嚴卿

時代… 晋代

場所… 会稽(浙江省)

記事… 魏序が東行の際、今は凶年で追いはぎが横行しており、嚴卿に安否の占いを請うた。卿は追いはぎではないが、東行すると災難に遭うので、止めることを忠告した。序は信じない。そこで、卿は防難の方法を教える。西の郊外に住む老寡婦から白い牡犬を譲ってもらい、それを船の舳先に繋ぐようにと。序は白犬を求めたが叶わず、そこでまだらの犬を用意した。卿は白一色でないと災いが少しは残る。ただそれは家畜に及ぶだけだと明言した。東行の途次、まだら犬がひどく吠えだした。見ると黒い血を一斗余りも吐いて死んでいた。その夜、序の屋敷でも鶯鳥が数羽原因不明で死んだが、家族は無事であった。

いぬ… 狗③(特に白雄狗・駁狗)

出典… 『晋書』卷九五「嚴卿伝」

## 4

【卷三】足にはいりこんでいた蛇(69)・华佗治瘡

人物… 劉勲、瑯邪(山東省)の人。官は河内(河南省の中の黄河以北の地)の太守。劉勲の娘。



占卜… 華佗、字は元化、名は**粲**、沛国（江蘇省）の人。

時代… 漢

場所… 瑯邪（山東省）

記事… 劉勲の二十歳前の娘が、左足の膝の裏側にできものができ、一度治っても数日後にまた出てくるという状態が七八年も続き、困っていた。そこで華佗を呼び寄せて調べてもらう。華佗は、茶色の犬一匹と良馬二頭を用意するように言い、犬の首に縄をかけて馬を交代させながら三十里余り引かせ、さらに人に歩いて引かせて五十里程行かせた。この時に娘を投棄で眠らせて、一方で犬の後足近くの腹部を切った。切ったところと娘のできものの部分を二三寸の間隔で向い合わせた。暫くするとできものの中から蛇の頭が見えてきた。錐で横から蛇の頭を突き、引つ張り出した。蛇の長さは三尺程であった。傷口に膏薬を塗ると、七日で快癒した。

いぬ… 犬③（特に黄犬）

出典… 『華佗別伝』（『後漢書』卷八二下、『三国志』卷二九「華佗伝」の注引）

【巻五】 李の種子（100）・張助種李

人物… 張助、南頓県（河南省）の人。

場所… 南頓県（河南省）

記事… 「犬」の用語は見られるが内容には、係わりがない。

いぬ… 犬①

特記… このことに関連する記録として、『風俗通義』卷九には、以下のような記載がある。

謹んで考えますに、汝南の南頓の張助という者が、田んぼで稲を植えている時に、李の種を見つけた。持ち帰ろうと思ったが、桑畑に空いている土地があったので、その種を植え、残りの飲み水をかけた。後に人が桑畑を何度か通るうちに（桑畑に）李の木が生えているのを見つけ、それを人々に話した。目が痛い者がいて、李の木陰で休み、「李君様、私の目を治してください、治ったらお礼に一匹の豚を捧げます」と言った。すると、目の痛みが少し良

くなくなったので、また、行ってお願いと自然に治った。その噂が広まり、目の見えない者が見えるようになったというように伝わり、あちこちからたくさんの方が集まり、その李の木の下は車馬がいつもごったがえし、お供えの酒や肉は満ち溢れていた。このようにして一年余りが経ち、遠くに出かけていた張助が帰って来て、この騒ぎを見て、驚いて「ここにどんな神がいるのか、私が植えたにすぎない」といった。そして、すぐにその李の木を斬った。

6 【巻六】 犬に角が生えれば(1220)・狗生角

人物.. 張助、南頓県(河南省)の人。

時代.. 文帝の後元五年(前一五九年)

場所.. 齊国の雍城門外

記事.. 主人公や占卜者はいなくて、犬に関する怪異の記事である。

文帝の後元五年六月、齊国の雍城門外に角を生やした犬がいた。京房『易傳』に、政治が民心を把握できないと、民は上の者を害そうとする。その象徴として犬に角が生じるといった異変が起きるとある。

いぬ.. 狗②

出典.. 『峰苑珠林』八七の『搜神異記』、『漢書』「五行志」第七中之上

特記.. このことに関連する記録として、『漢書』「五行志」第七中之上には、以下のような記載がある。

文帝の後の五年六月、齊の雍城門外に角の生えている狗があらわれた。これより先、帝の兄である齊の悼惠王の歿後、帝の齊の地を分割して、その庶子七人を立ててこれをみな王とした。彼ら兄弟はそろって強く、炕陽の心があり、それゆえ、犬禍があらわれたのである。犬は守り禦ぐものであり、角は兵器の像で、前方にあって上に向かうものである。犬に角が生えてならぬのは、あたかも諸侯が兵を挙げて京師に向かうべきでないと同様である。天は人を戒めることが早いのに、諸侯はさとりなかつた。六年後、呉・楚が叛き、済南・膠西・膠東の三国がこれに呼応し、兵を挙げて齊に至った。齊王はすでにあらかじめ城守し、三国がこれを囲んだ。たまたま漢は呉・楚を破り、よって四王を誅した。それゆえ天狗星が梁に下って呉・楚が梁を攻め、狗が齊で角を生じて三国が齊を囲んだ。

7

【巻六】 犬が豚と交われば（122）・狗与彘交

時代： 漢の景帝三年（前一五四年）

場所： 邯鄲（河北省西南部と河南省北部）

記事： 主人公や占卜者はいなくて、犬と豚とに関する怪異の記事である。

漢の景帝三年、邯鄲で犬と豚とが交わった。この時、趙王が六国と同盟して謀反を起こし、匈奴とも意を結んだ。『漢書』「五行志」には、犬は戦で多くの人命が失われる前兆、豚は北方の匈奴を指す。諫言を聞き入れなければ異類が交わりを結び害が生じるとある。また、京房『易傳』には、夫婦関係が厳正でなければ犬と豚とが交わるような異変が起きる。これは国家に戦乱が起きる象徴であるとする。

いぬ： 犬①・狗②

出典： 『峰苑珠林』四二の『搜神記』

特記： このことに関連する記録として、『漢書』「五行志」第七中之上には、以下のような記載がある。

景帝の三年二月、邯鄲で狗と彘が交尾した。惑乱の気は、犬豕の禍いに近いのである。当時、趙王遂は惑乱して、呉・楚と謀って反逆し、使者を匈奴につかわしてその援兵を求め、ついにその罪に伏した。犬は（吠え守るものゆえ）、兵革が異類に外附することによって衆を失うのに似るといふ占いであり、豕は北方匈奴の象である。言を逆にし聴く耳を失えば、異類に交わり、これによって害を生ずるのである。京房の『易伝』にいう、「夫婦の関係が嚴重でない」と、その妖怪として狗と豕が交わる。これを徳に反くといひ、国に兵革がある」と。

8

【巻六】 冠をかぶった犬（129）・狗冠

時代.. 前漢の昭帝、後漢の靈帝の時代

場所.. 役所

記事.. 主人公や占卜者はいなくて、犬に関する怪異の記事である。

前漢の昭帝の時に、尻尾のない大きな白犬が冠を被っていることがあった。後漢の靈帝には宮中で犬に冠を被せ印綬を腰に縛って遊んでいたところ、一匹の犬が逃げ出し司空府（官吏の勤務を観察する役所）に跳び込んだ。京房『易傳』には、君主が正しからず臣下が君主の位を篡奪しようとする、犬が冠を被り、朝廷の門から跳び出すという異変が起こるとある。

いぬ.. 狗④（特に白犬）

出典.. 昭帝については『漢書』「五行志」第七中之上、靈帝については『後漢書』「靈帝紀」に見える。

特記.. このことに関連する記録として、『漢書』「五行志」第七中之上には、以下のような記載がある。

賀が王であつたころ、また大きく白い狗が方山冠をかぶつてあらわれ、尾がなかった。これは衣服の妖怪であり、また犬禍でもあつた。賀がこのことを郎中令龔遂に問うたところ、遂は言った。「これは天の戒めであり、側に侍っている者がごとごとく礼儀をわきまえないこと狗が冠をつけているようだという意味である。このやからを去らなければ亡ぶのである。」賀が廢されてから数年後、宣帝は彼を封じて列侯としたが、また罪があり、死んでから後嗣が置かれなかつたのは、また犬禍で尾がないことの効である。京房の『易伝』にいう、「行ないが順当でない」と、その咎は人奴が冠をつけ、天下が乱れ、辟に嫡子なく、妾の子が位に即くことになる」と。またいう、「君が正しくない、臣が位を奪おうとし、その妖怪として、狗が冠をつけて朝廷の門を出ることになる」と。

9 【卷六】 犬の怪異（135）・犬禍

人物.. 石良と劉音、共に長安の人

占卜.. 不詳

時代.. 成帝の河平元年（前二八年）

場所… 長安

記事… 主人公として石良と劉音とが登場するが、犬に関する怪異の記事である。

成帝の河平元年（前二八年）、長安で石良と劉音と同居していた。人の形をしたものが部屋に現れたので殴りつける  
と犬になって逃げだした。後に武装した数人が部屋に現れたので殺したり傷つけたりしたが、全て犬であった。この  
ようなことが二月から六月まで及んだ。劉向の『洪範五行傳』では、これらはみな医務の禍であるとし、君主への諫  
言が聞き入れられない咎めとしている。

いぬ… 狗②犬①

出典… 『芸文類聚』九四の『搜神記』

特記… このことに関連する記録として、『漢書』「五行志」第七中之上には、以下のような記載がある。

成帝の河平元年、長安の石良という男が劉音という男と同室に住んでいたところ、人のような状のものがその室  
内にいたので、これを撃つと、狗になって、逃げ去った。そのあとで数人の者が甲を着、刀や弩などを持って良の  
家にやって来たので、良らが格闘して撃つと、死んだり傷ついたりしたが、それはみな狗であった。そうしたこと  
が二月からおこりはじめ、六月に至ってはじめてやんだ。

### 10 【卷七】 犬がものを言えは（209）・狗作人言

時代… 永嘉五年（三一一年）

場所… 呉郡嘉興（江蘇省）

記事… 主人公や占卜者はいなくて、犬に関する怪異の記事である。

永嘉五年（三一一年）、呉郡嘉興県の張林の家の犬が、突然人間のことはで「天下の人がみな餓死するぞ」と言った。  
果たして二胡の乱（二胡とは石勒と石虎のこと。共に匈奴の出身で、前趙に背いて後に後趙を建てた）が起こり、天  
下の人は飢餓に苦しんだ。

いぬ… 狗①

出典… 『晋書』「五行志」中、『宋書』「五行志」二

11 【卷九】 犬に噛み殺された鳥(244)・狗啗群鵝

人物… ・王莽。前漢第十一代元帝の皇后の甥。十三代平帝を弑して幼帝を立て、自ら摂政の位に着く。やがて新(九十九年)と国号を改めて皇帝を自称した。後に漢の遺族に滅ぼされる。

・翟義。漢代、上祭の人。方進の子で、宣の弟。官は東都(河北省大名府)の太守。

占卜… 不詳

時代… 後漢

場所… 東都(河北省大名府)

記事… 王莽が摂政の時、漢を篡奪しようとしていたことを知った東都の太守翟義は、莽に税義の兵を向けようとした。この頃、義の兄の宣は学生たちに講義をしていた。中庭には鶯鳥や雁が数十羽群れていた。そこへ外から犬が跳び込んできて鳥たちをかみ殺し、そのまま逃げて行方不明であった。宣はひどく不吉に感じた。数日後、莽は翟の三族を皆殺しにした。

いぬ… 狗②

出典… 『太平御覧』八八五、『太平広記』三五九の『搜神記』

12 【卷九】 公孫淵の死(245)・公孫淵家数怪

人物… ・公孫淵。三国魏の人。景初元年(二三七年)自立して燕王と称したが、翌年、父の康と共に司馬懿に斬られる。

・司馬懿。三国魏の人、字は仲達。文帝の時、諸葛亮と戦う。後に丞相となり、宣帝と諡される。

占卜… 不詳

時代… 三国時代

場所… 三国時代の魏

記事… 魏の太傅司馬懿は公孫淵を討ち、淵の父子を斬殺した。その前に、淵の家にはたびたび異変が起こった。一匹の犬が

赤い着物を着て屋上に登る、一人の子供が米を蒸す土鍋の中で蒸し殺されたことなどである。また襄平（戦国時代の燕の地）では、頭・目・口・喙がついていても手足がないのに揺れ動く大きな肉が現れた。これは国家滅亡の前兆だと占者が言った。

いぬ… 犬①

出典… 『太平御覧』八八五、『太平広記』三五九の『搜神記』、『三国志』公孫淵伝『晋書』「五行志」中、『宋書』「五行志」二・

三

13 【卷九】 諸葛恪の死（246）・諸葛恪被杀

人物… ・諸葛恪。三国呉の人、字は元遜。官は荊州の長官などを歴任した。後に孫峻に殺される。

・孫峻。三国呉の人、字は子遠。官は武衛都尉・侍中となる。

占卜… 不詳

時代… 三国時代

場所… 三国時代の呉

記事… 呉の諸葛恪が淮南征伐から帰還後、朝廷に参内しようとした時、胸さわぎで夜通し眠ることができなかった。翌日、恪が行列を整えて出かけようとする時、犬が衣をくわえて引っぱる。一度は外出をやめたが、二度目は犬が衣をくわえてもそれを押し切つて、恪は参内した。その結果、果たして恪は孫峻によって殺されてしまった。この時、留守中の恪の妻と女中の間にも、恪の死を予兆させる異変が起きていた。まもなく恪の一家を逮捕するために官吏と兵士がやってきた。

いぬ… 犬②

出典… 『芸文類聚』三五、『三国志』卷六四「諸葛恪伝」の注、『太平御覧』五〇〇の『搜神記』、『晋書』卷二八「五行志」中、

『宋書』卷三四「五行志」五、『独異志』下

## 14 【卷十二】 賁羊(301)・土中賁羊

人物… 季桓子。季孫斯のことで、桓は諡。春秋時代の魯国の大夫。

占卜… ・仲尼。孔子の字。

時代… 不詳

場所… 不詳

記事… 季桓子が井戸を掘っていて、土の缶のような物を見つめる。その中には羊がいた。人を介して孔子に、私は井戸を掘

っていて狗を見つけたが、これは何かと尋ねた。それは羊であると思うと孔子は答えた。木石の妖怪は夔や魍魎、水中の妖怪は龍や罔象、土中の妖怪は賁羊というとの説明が付加された。

いぬ… 狗①

出典… 『法苑珠林』十一の『搜神記』、『国語』魯語下、『初学記』七の『韓詩外伝』、『史記』卷四七「孔子世家」、『説苑』十八、『漢

書』卷二七中之下「五行志」第七中之下、『琬玉集』十二

特記… このことに関連する記録として、『史記』卷四七「孔子世家」には、以下のような記載がある。

孔子の年が四十三(二)歳の時、魯の昭公は乾候で没し、その弟の宋、即ち定公が魯公の位に立った。定公五年の夏、季平子が死んで、子の垣子があとを嗣いで立った。季垣子が井戸を掘って土製の瓶を手に入れた。その中に羊のようなものがあつた。仲尼に問うていった。「狗を手に入れたが——」と。仲尼が言った。「わたしが聞いておるところからすれば、羊でしょう。丘はこう聞いています。木石の怪物は夔、魍魎であり、水中の怪物は、龍、罔象であり、土の怪物は賁羊で、羊の形をしたものである、ということでもあります」と。(『史記』 明治書院)

## 15 【卷十二】 地中の犬(302)・地中犀犬

人物… 懷瑤、謡の近所の長老、張懋、沈充の四人。懷瑤については不詳。張懋は呉郡の太守で、後に呉興の兵である沈充に殺される。

占卜… 不詳



時代… 晋惠帝元康年間（二九一～二九九年）、東晋元年太興年間（三一八～三二一年）

場所… 吳郡婁県（江蘇省）、吳興（浙江省）

記事… この章では、二つの事柄が記載されている。一つは次のようなことである。晋惠帝の元康年間、吳郡婁県の懷瑤の家で、

ある時、地面の中から犬の鳴き声が微かに聞こえてきたので、その場所をみると、ミミズ大の小穴だった。瑤がここを掘ってみると、雌雄が一匹ずつの子犬がいた。目はまだ開いておらず、普通の犬よりも大きかったが、これを養った。周囲の人々がみな見にきた。その中の長老の一人が、これは犀犬と言ひ、これを得た者は家を富ませることができると、是非これを養いなさいと言った。瑤は子犬の眼がまだ開いていなかったため、穴の中に返してやり、石臼でこれを覆った。一晩たつと、穴も無いのに、二匹の子犬は行方不明となった。その後の瑤家では長年の間、格別のこともなく大過なく過ごした。

もう一つは次のような内容である。大興年間、吳郡の太守の張懋が、離れの床下から犬の鳴き声を聞きつけたので、探したが見つからなかった。そのうち地面が裂けて二匹の犬が出てきた。捕まえてこれを養ったが、二匹共死んでしまった。その後、懋は吳興の兵である沈充に殺されるといふ事態が生じた。

いぬ… 犬⑦狗①

出典… 『法苑珠林』十一、『太平御覽』四七二、『太平廣記』三五九の『搜神記』、『晋中興書』微祥説、『晋書』卷二八「五行志」中、『宋書』卷三二「五行志」二

16 【卷十二】 犬蠱（317）・鄱阳犬蠱

人物… 趙寿、陳岑、私（話し手）とその伯父の妻、趙寿の妻。

占卜… 不詳

時代… 不詳

場所… 鄱陽（江西省）

記事… 鄱陽（江西省）の趙寿は犬蠱を持っていた。ある時、陳岑という人が寿を訪ねると、突然大きな黄色い犬が六・七匹、

群れきて岑に吠えついた。また私の伯父の妻が壽の妻と食事をした時には、血を吐いて今にも死にそうになった。桔梗を刻んで飲ませると治った。蠱には化け物がいて、幽鬼のように妖しく形状が変化する。それが人に向かった場合には、皆死に至る。

いぬ… 犬②、狗①

出典… 『太平御覧』七三五、七四二、九〇五、九九三の『搜神記』

### 17 【卷十四】 蛮夷の起源（341）・狗祖盤瓠

人物… 趙寿、陳岑、私（話し手）とその伯父の妻、趙寿の妻

占卜… 不詳

時代… 不詳

場所… 鄱陽（江西省）

記事… 高辛氏（中国伝説時期の帝王。黄帝の曾孫、帝）の頃の話である。王宮住まいの老婦人が耳の病気で長患いをしていて、医者が耳の中から病原の「頂虫」を取りだした。のちにその「頂虫」が五色模様の犬に変化する。その犬は「盤瓠」と名付けられる。当時辺境の蛮族である戎呉が国境を侵していた。そこで王は、戎呉の將軍の首を取った者には、金千斤、一万戸の領主の地位、王女を与えると天下に布告した。ある日のこと、「盤瓠」が戎呉の將軍の首を銜えて現れた。「盤瓠」が動物であることを理由に人間の報奨を与えることはないと王や群臣が反対する。王女は、これを天命と受け止めて「盤瓠」のもとへと嫁ぐ。「盤瓠」は、王女を連れて深山である「南山」へと入る。王は娘の身を悲しく思い、使者を遣って探させたが、その度に山峰が震撼し、雲がたちこめ、風雨が起り、使者が辿りつくことはなかった。三年が経過して、王女は六男六女を生んだ。

子供たちは自ら相手を決めて夫婦となる。のちに母親である王女は、帰ってきてこの話を王に語った。王は使者を遣って娘の子供たちを迎える。この時には天候の異常は起こらなかった。子供たちは、短い着物を身に着け、言語は解せず、屈んで飲食をし、好んで山に住んだ。王はその気持ちを汲んで、名山と広大な沢を与え、「蠻夷」と呼んだ。

今の蛮族である梁・漢・巴・蜀・武陵・長沙・廬江の諸都がこの地域である。また今も、供物を用意して「盤瓠」を祭っている。

いぬ… 犬①

出典… 『芸文類聚』九四、『法苑珠林』十一、『初学記』二九、『太平御覽』七五八の『搜神記』、応邵『風俗通義』、『魏略』、干宝『晋紀』、『後漢書』卷八六「南蠻西南夷列伝」

18 【卷十四】 鵠蒼 (343) ・ 鵠蒼銜卵

場所… 徐の国 (安徽省泗水県の北)

記事… 昔、徐の国 (安徽省泗水県の北) の官女が、懐妊して卵を生んだが、不吉だとして、川原に遺棄した。「鵠蒼」という名の犬が、卵を持って帰った。やがて子供が生まれ、徐の国の後継ぎとなった。鵠蒼は死の間際に、角が生え九つの尾が現われ、実は黄龍であったと事が分かり、徐の領内に葬られた。今でも、そこに犬塚が残っている。

いぬ… 犬①、狗①

出典… 『博物志』八の『徐偃王志』、『水経注』八の劉成国『徐州地理志』、『独異志』

19 【卷十九】 度朔君 (407) ・ 度朔君

人物… 蔡庸・蘇という役人・曹操など

場所… 河東郡 (山西省)

記事… 袁紹 (字は本初) が冀州 (河北省) にいた頃、河東郡に「度朔君」という神が現れ、土地の人々はその神のために廟を立てた。この度朔君という神にまつわるエピソードである。ちなみに、度朔君は「自分の先祖は兗州を治めていた」と自述している。

一つ目のエピソード。清川郡 (河北省) の太守になった陳留郡 (河南省) の蔡庸が参拝した際に、度朔君は三十年前に亡くなった蔡庸の息子の「道」が、蔡庸に会いたがっていることを伝え、蔡庸親子を引き合わせた。

次のエピソード。ある時、蘇という役人が母親の病氣治療のために参拝した。しばらく待たされた後、太鼓の音とともに度朔君が西北から現れた。引き続き、黒い頭巾を被り、黒い着物を着た頭髪が五色の男がやってきた。その男が立ち去ると、魚の頭のような形の冠を被り、白い服を身につけた男が現れた。二人の男が立ち去った後、「さっきの男達は南海君だ」と、蘇は度朔君から告げられた。蘇は『五経』、とりわけ『礼記』に精通していたが、度朔君との学問上での議論では全く敵わなかった。母の病氣の治療の方法としては、家の近くの東の古い橋を修復すれば、病気がよくなると度朔君から教えられた。

最後のエピソード。曹操が袁譚を討伐した時、部下を遣わし度朔君に絹千疋の徴発を迫るも、これを拒否される。曹操は廟を壊すために張郃を遣わせた。度朔君も数万の兵士を派遣してこれに立ち向かわせる。この時、辺り一面霧が立ち込めて、廟の位置が分からなくなる。だが、度朔君は全員に退避を命じる。何年か後、蘇の家と隣家に神が降る。実はそれが度朔君であった。度朔君は元の廟の位置は運氣が悪いので、別の場所に世話になりたいと、人を介して曹操に伝えた。曹操は承諾して、街の北側の楼閣に度朔君を住まわせる。数日後、曹操は狩りに出かけ、不思議な獲物を捕まえる。その夜、度朔君の住む楼閣から「子供が消えた」と鳴き声が出た。曹操はそれを聞いて、神の威力が衰退した予兆であると察知して、翌早朝、数百匹の犬を連れて、この楼閣を取り囲ませた。そして、その楼閣から飛び出た動物を、犬が噛み殺してしまった。その後は、この楼閣に廟の神は現れなくなった。

いぬ…  
犬③

出典… 『太平広記』二九三の『搜神記』、『初学記』二八、『芸文類聚』八六、『太平御覧』八八二、九六八の『列異伝』

20 【巻十八】 煮て食べた木の精 (418) ・ 陸敬叔烹彭侯

人物… 陸敬叔

時代… 三国時代

場所… 建安郡 (福建省)

記事… 呉の孫権の時、陸敬叔は建安郡の太守となった。陸敬叔は人を遣わし大きな楠の樹を伐らせた。その樹は斧を何度も

振り下ろさないうちに、急に血が流れ出し、伐り倒すと人の顔に狗の体をもつ物が中から出てきた。陸敬叔は「これは彭候というものである」と言った。そこでこれを煮て食べたところ、その味は狗のようであった。『白沢図』には「木の精を彭候といい、姿形は黒狗のようで、尾は無い。煮て食べることができ」とある。

いぬ：  
狗③

出典：『法苑珠林』八、『太平御覽』八八六、『太平広記』四一五の『搜神記』

21 【卷十八】 千年の狐（421）・张华擒狐

人物：  
張華

時代：  
晋の恵帝の時

記事：張華（字は茂先）は、晋の恵帝の頃の司空（丞相・上公に次ぐ高官）であった。同じ頃、燕の昭王の墓の前にまだら

狐が住んでいて、積年の功で変化ができた。そして、張華に会うため書生に姿を変えて、自分の才能で張華に会えるかどうかを墓前の華表に聞いた。華表は「会えないことはないが、張華は知恵がある。君は議論に負けて恥をかい戻ってくることはできない。自分の千年の才能を失うばかりか、私自身にも迷惑をかけることになるだろう」と忠告したが、狐はその忠告を無視して張華に会いに行った。書生は佇まいや振る舞いが風流な感じであった。しかし、書生が文学について述べた意見が張華の今まで聞いたことのない意見だったり、三史について議論しても、その意見に張華が負けてしまうような状態だった。そのことで張華は書生妖怪か狐狸だろうと疑い、門の警備を厳重にさせた。そんな折、張華のもとに豊城県（江西省）知事の電渙（字は孔章）が訪れたので、張華は書生の事件を相談した。電渙は書生のことを疑っているなら、犬で試すよう伝え、実際に試してみたが、犬にその書生は恐れず、怒った張華は千年を経た古木で照らせばその正体も暴けるとして、使者にその木を伐らせにいかせた。その道中、空中から現れた子供に使者が華表を探りに行くことを伝え、子供は「馬鹿な老いばれ狐のせいで、私も災いから逃れることができな」と声をあげて泣いたと思いきや、ぱっと消えて見えなくなった。使者が千年の木を伐採すると、血が流れた。その木を持ち帰り、火を点けて若者を照らしたところ、まさしくまだら狐だった。張華は「私に会うことがなければ、

狐と華表はもう千年は生きられただろう」と言い、その二つを煮殺してしまった。

いぬ… 犬①、狗①

出典… 『太平御覧』九〇九の『搜神記』、『続齋諧記』、『集異記』（『太平広記』四四二引）、『瑠玉集』十二、稗海本『搜神記』

## 22 【卷十八】 消えた下男（425）・山魅阿紫

人物… 陳羨

占卜… 道士

時代… 後漢の建安年間

場所… 西海（青海省）

記事… 後漢の建安年間に、西海（青海省）の都尉になった陳羨（沛国（安徽省）の人）には王靈孝という部下がおり、二度も理由なく逃亡した。連れもどした王靈孝を陳羨は殺そうと考えていたが、また逃げられた。王靈孝を長時間捜しても見つからないため、妻を尋問したところ、王靈孝は妖怪に連れ去られたと証言した。そして郊外を捜したところ、空の塚の中から王靈孝を見つけ、人と犬の声を聞いた妖怪は逃げていった。王靈孝は人間の受け答えができず、「阿紫よ」としか言えなかったが、十数日経ったある日、王靈孝は元の状態に戻り、「阿紫」と名乗る美しい女性と一緒に生活し、犬と遭遇しても妖怪だと気づかれなかったことを証言した。道士は「これは山の妖怪だ」と言い、また、『名山記』に「大昔の売春婦が狐に姿を変え、「阿紫」と名乗り、そこから多くの狐が「阿紫」と名乗ることが多い」とある。

いぬ… 犬②、狗①

出典… 『太平広記』四四七の『搜神記』

## 23 【卷十八】 白犬のいたずら（432）・田琰杀狗魅

人物… 田琰

場所… 北平（河北省）

記事…

北平の田琰は母親の喪に服しており、もうすぐ一周忌になろうとしていた。その夜、田琰は妻の部屋に入ってきたので、これを疑った妻が「喪に服している最中なのに、何故このようなことをするのか」と尋ねても、これを聞き入れずに田琰は妻と交わった。その後、田琰は妻の部屋に入り、しばらく一言も喋らなかったので、妻は先程の部屋に入ってきたことも含めて田琰を責めたが、それを田琰は妖怪の仕業だと気付き、夜が暮れても寝ずに喪服を廬にかけた状態で待ち伏せした。そうした後、一匹の白い犬が現われ、喪服をくわえた後、人間に化けて喪服を着、家の中に入っていった。その後を田琰は追ひ、丁度妻の寝台上がろうとしたところを、すぐに打ち殺し、妻も恥ずかしさの余り死んでしまった。

いぬ…

狗①（白狗）犬①

出典…

『太平広記』四三八の『搜神記』

24 【卷十八】

酒屋の老人（433）・沽酒家老狗

人物…

来季徳は南陽（河北省）の人で、司空を務めた。

場所…

南陽（河北省）

記事…

亡くなった司空であった南陽の来季徳の遺体は棺に納められていたが、安置の後忽然と姿を現わし、祭壇の上に座った。顔色・服装・声色も確かに生前そのままだった。孫や子、女性達と、順に説教を行ったが、話は筋道が通っていた。奴隷を鞭で打ったが、皆はその過ちを受け入れていた。お供え物を飲食し尽くすと、別れの言葉を述べて去っていったので、家族の人達は皆大いに悲しんだ。このようなことが続いてから数年が経ち、家族の人達はいよいよ嫌気がさしてきた。その後、飲酒をし過ぎて酔っぱらって正体を現したのだが、ただの老いた犬であった。すぐに皆でこれを打ち殺した上で調べると、村の酒屋の犬であった。

いぬ…

狗②（老狗①）

特記…

このことに関連する記録として、『風俗通義』怪神第九には、以下のような記載がある。

謹んで考えますに、司空である南陽の来季徳は、死後すぐに埋葬の儀式をしないで部屋に遺体を安置されていた

ところ、突然祭壇の台に座り、姿・顔かたち、着ている物、声すべて生前のようであった。孫や子ども、婦人たちに次々に訓戒をし、その内容は理路整然としていた。使用人に体罰を与え、それはすべてその過失に相当するものであった。十分に飲食した後、別れの挨拶をして去って行った。家族は大変哀しみ別れたくないとおもった。しかし、このようなことが三、四回あると、だんだん嫌がるようになった。その後、酒に酔って正体を現し、それがただの年とつた犬であったので、とうとうそれを撲殺し、街角に行つて調べてみると、酒屋の犬であった。(『風俗通義』 明德出版社)

出典… 『太平広記』四三八に引く『捜神記』、『風俗通義』怪神篇

25 【卷十八】 門前の役人(434)・黒幘白衣吏

人物… 王瑚、字は孟璉

場所… 山陽(山東省)、東海郡(江蘇省) 蘭陵

記事… 山陽の王瑚は、東海郡蘭陵の尉だった。真夜中に、黒い頭巾を被り白い単衣を着た役人が現われて、縣の役所にやつて来て門を叩く。これを出迎えると忽然と姿を消してしまう。このようなことが数年続いた。その後これをみると、一匹の老いた犬がいた。黒い頭に白い体はそのまま、役所に来ると人に変わるのである。このことを孟璉に報告して犬を殺したところ、怪異は無くなった。

いぬ… 狗①

出典… 『芸文類聚』九四、『太平御覽』九〇五、『太平広記』四三八の『捜神記』

26 【卷十八】 怪異に動じない人(435)・李叔堅見怪不怪

人物… 李叔堅

記事… 桂陽郡(湖南省)の太守の李叔堅は、その当時従事(州の長官の輔佐役)だった。犬を自宅で飼っていたが、人間のよう立って歩きだしたため、家族の人は「殺してしまおう」と考えた。しかし、李叔堅は「犬と馬は君子に例える



ことができる。人が歩くのを見て、この犬も真似したのだろう。何も気をもむことはない」と言った。またしばらくして、犬が李叔堅の冠を冠って走り出し、家の人達はとも驚いた。だが、李叔堅は「誤って冠に触れてしまい、紐に引っ掛ってしまっただけだ」と言う。ついには、竈の前で火を焚いたので、家族はいよいよ不安になり慌てたが、それでも李叔堅は「男性も女性もみんな畑の中にいるから、犬が手伝いで火を焚いたのだ。近くの人に迷惑をかけずに済んだのは幸いなことだ。これのどこが悪いことであろうか」と言った。数日後、犬は急に死んだが、つまるところ、少しも災いは起こることはなかった。

いぬ…  
犬③狗④

出典…  
『風俗通義』九・怪神篇

特記…  
このことに関連する記録として、『風俗通義』怪神第九には、以下のような記載がある。

世間にはしばしば犬が災いをなすことがあるので、これを打ち殺して、その血を家の門口に塗って災いをさけようとするが、多くは災いにみまわれてしまう。

謹んで考えますに、桂陽の太守である汝南の李叔堅は、若い時に、まだ、下級の従事の職であって家にいた時、犬が人のように立つて行くことがあり、家の者はこの犬を殺してしまえと言った。叔堅は「犬や馬が君子を諭したり、犬が人間の行いを見て、人間に倣っているのに、どうして傷つけることがあるだろうか」といった。叔堅は県令に謁見して、家に帰ってから、冠を長いすに置くと、犬がそれをかむって持って行ってしまった。家の者は大変驚いたが、叔堅はまた、「犬が誤って冠の紐にさわると、冠の紐が犬に引っ掛っただけである」といった。また、犬が竈の前で火種を蓄えていたので、家の者はますます恐れたが、叔堅はまた「女や子どもが皆田んぼで働いていたので、火種を蓄えて手伝っただけで、全く村人に面倒をかけたくないのに、どうしてこれを憎むことができようか」といった。しかし、村の中では人々は気味悪がつて噂をし、犬が妖怪でないとは言わなかったが、敢えて殺すことはしなかった。しかし、その後数日して、犬が突然死んだが、少しの災いもなかった。その後、叔堅は大尉の属官・固陵の長官・原武の長官となり、とうとう高い位を得た。（『風俗通義』 明德出版社）

## 27 【卷十九】 大蛇を退治した娘（440）・李寄斬蛇

人物… 寄という李誕の一番末の娘

場所… 閩中郡（福建省）

記事…

東越の閩中郡（福建省）の庸嶺という高さ数十里の山の西北にある沢の中に、長さ七・八丈、胴が十围あまりの大きな大蛇が住んでいて、以前から地元の人達に恐れられていた。牛や羊を用いて祭っていたが、それでも効果が無かった。ある時、その大蛇は十二・三歳の娘が食べたいと言ってきた、都尉と県令は共にこの状況を憂いたが、災いは止まらず、自分の低い家の娘や罪人の家の娘を尋ね求めては八月一日の祭の時に蛇の穴の入り口に娘を送り届けた。毎年、合計九人を要し、蛇が出てきて娘達を呑み込んだ。将楽県の李誕の家には、娘六人ばかりの息子が一人もいない家庭だった。その中の「寄」という名の一番末の娘が、求めに応じて行くことを志願し、説得したが両親は許さなかった。だが、寄は自分でこっそりと家を出て、いい剣と蛇を噛む犬を求めた。八月一日になり、廟の中に入って座った。剣を懐に忍ばせ、犬を引き連れた。最初に数個の餅を丸めて蜜と麦粉をかけた物を穴の入り口に置いておき、蛇がその臭いを嗅いで食べ始めたところで、寄は犬を放ち、その犬は蛇に噛みつき、寄も後ろから斬りつけた。蛇はのた打ち回って死んだ。寄は穴の中で九人の娘の髑髏を見つけ、それらに向かって「お前達は弱虫だから蛇に喰われることとなったのよ。本当に哀れなことね」と言って、闊歩して帰った。越王はこの話を聞き、寄を呼んで后にし、その父親を将楽の令に任命し、母親と姉達にも皆褒美の物を与えた。それ以来、東冶では妖怪が現われることは二度と無くなった。その歌謡は今でも残っている。

いぬ… 犬④

出典… 『北堂書鈔』一二二、『芸文類聚』九十四、『法苑珠林』四二、『太平御覽』三四四、四三七、四四一、九〇五の『搜神記』、『太

平實字記』一〇一の『坤元録』

## 28 【卷十九】 司徒府の蛇（441）・司徒府大蛇

人物… 魏舒

時代… 晋の武帝の咸寧年間

記事… 晋の武帝の咸寧年間に魏舒は司徒になった。役所に十丈ほどの長さの大蛇が二匹がいて、政務室の平たい垂木の上に数年間住みついていたが、そのことは誰も知らなかった。しかし、役所では度々子供・鶏・犬等がいなくなることを怪しんでいた。その後、ある夜にその内の一匹が、柱の側を通った際に刃物で切られて負傷したため、垂木に登れなくなった。それによってこの事実を知り、数百人を擁し、長時間攻撃して殺害した。大蛇がいたところを覗くと部屋の天井いっぱい骨の残骸が散らばっていた。そこで、役所は一旦取り壊し、再度そこに建て直した。

いぬ… 犬①

出典… 『太平広記』四五六の『搜神記』、『晋書』卷二十九「五行志」下、『宋書』卷三十四「五行志」五

29 【卷二十】 忠犬 その一（457）・义犬救主

人物… 李信純

時代… 呉の孫権の時代

場所… 襄陽郡紀南県（湖北省）

記事… 呉の孫権の時代に、襄陽郡紀南県に李信純という人おり、「黒龍」という名の犬を飼っていた。大変可愛がり、李信純は黒龍をどこにでも一緒に連れていき、食事も全部分け合って食べていた。そんなある日、郊外で深酒して酔ってしまい、家に帰れぬまま草むらの中で寝てしまった。偶然、猟に出かけていた太守の鄭瑕が田んぼの深く生い茂った草に火を放たせ焼き払った。寝ている李信純の所に火の手が迫り、黒龍はそれを見つけ、李信純の服を口で引っ張るが李信純は全く動かなかつた。近くの谷川に黒龍は走って川の中に入り、全身を濡らして水を注ぎ、李信純の災難を逃れることができた。黒龍は水を運ぶのに疲れ果て、傍らで倒れて死んでしまった。そこから少しして、李信純は黒龍が全身を濡らしたまま死んでいるのを見つけ、火災の跡を見て悲嘆に暮れた。鄭瑕にこのことを報告し、このことを憐れんだ鄭瑕は「犬が恩に報いることは人間よりも立派である。恩を知らない人間は犬ですらないのではなからうか」と言った。そして人に命じて棺桶・衣類・寝具を用意し、黒龍を葬った。今でも紀南には高さ十丈余りの「義犬

冢」がある。

いぬ… 犬⑦狗①(黒龍)

〔出典… 勾道興本『搜神記』、稗海本『搜神記』〕

30 【卷二十】 忠犬 その二(458)・快犬救主

人物… 華隆

時代… 太興年間(三一八～三二二年)

場所… 呉の地方

記事… 太興年間、呉国の華隆という人は「的尾」という足の速い犬を飼っていて、いつも一緒に連れていた。ある時華隆は

川辺に出かけ、荻刈っていた際に大蛇に巻かれ、的尾が勇気を出して蛇を噛み殺したが、華隆の意識は無かった。的尾は周囲を鳴きながら駆け回り、船まで走って戻り、そして草むらに戻った。この的尾の様子を怪しんだ華隆の従者は、的尾の後に付いていき、気絶している華隆を見つけ、家に連れて帰った。的尾は華隆のことが心配で、食事をしようとしなない。ついに華隆が意識を取り戻した所、ようやく的尾は食事をし始めた。そうして、華隆は親戚と対するよう到的尾を可愛がった。

いぬ… 犬④(的尾)

〔出典… 『太平御覧』九〇五、『太平広記』四三七の『幽明録』〕

#### 四 結語

『搜神記』の中の「いぬ」の表象について、前掲の怪奇譚をもとにまとめると、以下のように分類できる。

○いぬが人の犠牲になって人命を救う。

・「いぬ」が、魏序の厄災の身代わりなって死ぬ。（ぶち犬の効験 68話）

・李信純の火事の災難からの救出のため、「いぬ」の「黒龍」が、命がけて水を運んで救命する。「いぬ」は、最後には力尽きて死ぬ。（忠犬 その一 457話）

・「いぬ」の「的尾」は、華隆が蛇に巻きつかれたのを助け、意識を失った華隆のことを家臣に告げる。その後、意識を取り戻した華隆は、「的尾」を親戚同様に可愛がる。（忠犬 その二 458話）

○人間の病気を治癒する。

・「いぬ」は、張邵（人名）の母親の病気を治すために買ってきた猿を噛み殺す。そうすると母親の病気が治った。（ふしぎな猿 60話）

・「いぬ」は、劉勲の娘の左足のできもの治癒のため、犠牲となって殺される。娘の足は全快する（足にはいりこんでいた蛇 69話）

・「いぬ」そのものは登場しない。ただ、多くの「いぬ」が吠えると、目の悪い人が視力を回復できるという言い伝えがある。（李の種子 100話）

○狐つきを退治する補助をする。

・「いぬ」は、若者の書生に化けた狐の正体を暴くために使われたが、狐の化け物には効き目はなかった。（千年の狐 421話）

・狐の妖怪にさらわれた王霊孝を助けるため、陳羨は「いぬ」も連れていき、王霊孝を助け出す。（消えた下男 425話）

○いぬに異変が起こることは禍の予兆（国家・戦争・反乱・人・下剋上など）である

・「いぬ」に角が生えるということは、政治家が民意を反映していない証左となり、いずれは反乱が起きる。（角生えれば 120話）

・「いぬ」の異変は、戦争で多数の死者が出ることの予兆で、「いぬ」が「ブタ」と交わるということは、戦争が起こる予兆である。その通りに趙国が謀叛（呉楚七国の乱）を起こした。（犬が豚と交われば 122話）

・臣下が下剋上を狙うと、冠を冠った「いぬ」が朝廷の門を跳び出す現象が起きる。(冠をかぶった犬 129話)

・君主が諫言を聞き入れなければ、「いぬ」が人間に化けたり、武装して人間と戦うことがある。(犬の怪異 135話)

・「いぬ」が突然人間の言葉を喋ると、程無く胡人による反乱が起こり、人々は飢餓に苦しんだ。(犬がものを言えば 209話)

・太守翟義は、王莽が王位を篡奪しようとする野心を知り、義兵を挙げてこれを取り除こうと企んだ。この時「いぬ」が、鶯鳥や雁を噛み殺してしまう異変が起きた。数日後に、王莽は敵対する翟義の身内を皆殺しにした。(犬に噛み殺された鳥 244話)

244話)

・公孫淵父子は司馬懿によって惨殺された。事件発生前の淵の家では、「いぬ」冠をかぶり、赤い服を身に纏い、正装して屋上に行ったという異変があった。(公孫淵の死 245話)

・「いぬ」は、諸葛恪に出廷しないようにと再三阻止行動をするが、ついには追い払われてしまう。朝廷に出かけた諸葛恪は、朝廷で殺されてしまう。(諸葛恪の死 246話)

・「いぬ」が人間のように立ち歩きをしたり、火を起こしたりと奇妙な行動をしたので、周囲の者が気味悪がり「いぬ」を殺そうとした。飼主の李叔堅は、全く気にせず普段通りに過ごした。そうすると、「いぬ」は間もなく死んで、凶事は起きなかった。

(怪異に動じない人 435話)

○怪物退治のお供の一角として役目を果たす

・寄という娘が大蛇退治するため、役人に剣と「いぬ」とを所望する。寄は大蛇退治の目的を果たす。(大蛇を退治した娘 440話)

440話)

○人間の祖先譚、人間に生まれ変わって国王になる

・「いぬ」が蛮族の祖先となる。(蛮夷の起源 341話)

・「鶴蒼」という名の「いぬ」が、卵を持ちかえる。その卵から生まれた子供が、のちに徐の国の王になった。(鶴蒼 343話)

○いぬが災害をもたらしたり、悪さをする。

・「いぬ」は、臧仲英の家で数々の災いを起こし、最終的には殺される。その後、怪異現象は消えた。(許季山の易断 51話)

・懐瑤の家で地中から「いぬ」の泣き声がある。その後まもなく、この二匹の犬は懐瑤の家から忽然と姿を消す。懐瑤の家では特別何も起こらなかった。のちに(時空を変えて)張懋の家の床下から「いぬ」現れ、それを飼った張懋は兵士に殺害されてしまう。(地中の犬 302話)

・趙寿の飼っている犬はいろいろな姿・形に変化する妖怪で、「いぬ」にも変化する。その犬は標的にされた人間が必ず殺されてしまう。(犬蠱 317話)

・曹公の放った数百匹の「いぬ」が、「度朔君」という神を殺し、廟神を途絶えさせてしまった。(度朔君 407話)

・「いぬ」の妖怪が田琰になりすまし、妻の部屋に入り交わろうとしたが、田琰本人に発見されて殺される。(白犬のいたずら 432話)

・村の酒屋の老いた「いぬ」が、亡くなった司空の来季徳になりすまし、私利私欲の限りのやりたい放題を尽くす。最後には来季徳の遺族によって殺される。(酒屋の老犬 433話)

・真夜中になると、一匹の老いた「いぬ」が、白い単衣を着、黒い頭巾を被った役人に化けて県の役所の門を叩く。迎えると姿を消してしまうというように続いた。数年後、この「いぬ」を殺したら怪異は無くなった。(門前の役人 434話)

○その他

・「いぬ」自体は、登場しないが、「賁羊」という土の中の妖怪を見つけた季桓子が「いぬ」だと思い込んでいた。(賁羊 301話)

・樟の大木を切らせたところ、人の顔と「いぬ」の体を持った木の精が出てきた。煮て食べると「いぬ」のような味がした。

(煮て食べた木の精 418)

・子供・鶏や「いぬ」がしばしば消えるという怪奇が起きた。のちに役所に住みついた大蛇を退治すると、大蛇の体内からその残骸の骨などが見つかった。(司徒府の蛇 441話)

この他「やまいぬ」（白虎の墓 274話）に関する話が一つ出てくるが、通常の「いぬ」とは係わらないので割愛した。また、『捜神記』の中の「いぬ」に関する用語は、漢語史研究の面でも面白い問題があるが、今後の課題としておく。

### 注釈

(一) 志怪ということばがみえる中国の古典資料としては、『莊子』逍遙遊篇（第二）が初出である。

北冥に魚あり、その名を鯤と為す。鯉の大きいさ其の幾千里なるかを知らず。化して鳥と為るや、その名を鵬と為す。鵬の背、其の幾千里なるかを知らず。怒して飛べば、其の翼は垂天の雲の若し。是の鳥や、海の運くとき則ち將に南冥に徒らんとす。南冥とは天地なり。

齊諧は怪を志（識）る者なり、諧の言曰わく、鵬の南冥に徒るや、水の撃（激）すること三千里、芙搖に搏ちて上ること九千里、去るに6月の息を以てする者なりと。野馬や塵埃や、生物の息を以て相い吹くなり、天の蒼蒼たるは其れ正色なるか。其れ遠くして支極する所なければか。其の下を視るや、亦た是くの若くならんのみ。且夫れ水の積むや厚からざれば、則ち其の大舟を負（載）するや力なし。杯水を坳堂の上に覆せば、則ち芥これが舟と為らんも、杯を焉に置かば則ち膠（着）せん。水浅くして舟大なればなり。風の積むや厚からざれば、則ち其の大翼を負するや力なし。故に九万里にして風斯ち下に在り、而る後乃今や風に培（馮）り、背に青天を負いて、これを天闕（抑遏）する者なし。而る後乃今や將に南を図らんとす。

『莊子』 岩波書店

ここでは「志怪」は、「識怪」と同意語として、「怪をしる」と解釈する。

(二) 小説ということばがみえる中国の古典資料としては、同じく『莊子』の外物篇（第二六）が初出である。

夫れ竿纍を掲げ、灌瀆に趣き、鮓鮓を守るは、其の大魚を得るに於いて、難し。小説を飾りて以て縣令に干むるは、其の大達に於いて亦た遠し。是を以て未だ嘗て任氏の風俗を聞かざれば、其の與に世を経すべからざるや、亦た遠し。



〔『莊子』 岩波書店〕

この資料では小説とは、つまらない弁舌、とるに足らない意見などと解釈する。

また小説を言語作品の一つのジャンルとして区分としたものに、班固が著した『漢書』芸文志（第十）がある。春秋戦国期の諸家の著述を、先ず六つの分野に大別する。下位区分の一つとして諸子略を設け、その中を細分して儒家・道家・陰陽家・法家・名家・墨家・從横家・雑家・農家・小説家を挙げる。「小説家は十五家、千三百八十篇あった」と記載しているが、現在ではほぼ散逸している。小説という事項と関連する記載は以下の通りである。

右、小説家は十五家、千三百八十篇あった。

小説家者流は、おそらく稗官（古の官で、街談巷語を集めることを掌る）から出たものと思われる。街談巷語は、街や巷で聞いたことを路傍で伝え説くような者が造ったのである。孔子のことは、「たとい（一技一芸の）小道にも、かならず観るべき道理はあるもの、ただ遠大な目的を達成するには、小道に拘泥して大事を忘れることを恐れる。そのため君子はそうした小道を学ばないのである」（『論語』子張）とある。しかしながらやはりまた小説を減ぼさないで、巷にいつ小知の者が言い及んだことも、これを綴って忘れ去られないようにする。その中にもし一言の採るべきものがあるにせよ、やはりまた芻蕘（草刈りと木こり）や狂夫（大言壮語する人）の意見にすぎない。：

以上、およそ諸子は「百八十九家、四千三百二十四篇（実際には計四千五百四十一篇で、二百七十七篇多い）あった。蹴鞠一家、二十五篇を出した。

諸子十家のうち、観るに足るものは九家（小説を除外する）だけである、いずれも、王道が衰微し、諸侯は征伐に努め、時君や世主がそれぞれの好悪に従ってその方法を異にしたところから起こった。かくて九家の術は鋒の突き出るように並び興り、おのおの一つの端緒を引いて、おのれの善しとするところを尊び、それをもって奔走游説し、諸侯の合意を獲ようとした。そのこととは異なっている、たとえば水と火が互いに滅ぼしあい、また互いに生かしうごとく、互いに補いあうのである。仁の義における敬の和における関係は、お互いに反対しあいながら、みな互いに成就しあうものである。：

さればこれを九家の術によって補うことは、かの野に求めるになおまさらないであろうか。もし六芸の術を修めて、この九家の言を觀、短を捨て長を取ることができれば、諸子のあらゆる方略に通達できるのである。

〔漢書〕 筑摩書房)

この資料でも前出の『莊子』の解釈と大差はなく、街や巷でできたことを路傍で伝え説くような街談巷語と捉えている。

(三) 現存の『搜神記』について、『干寶』『搜神記』(白帝社)では以下のような見解を示している。

現行『搜神記』二十巻は原書のままではなく、散逸したものを後人が再編したものである。それは『法苑珠林』『唐開元占經』、また『藝文類聚』『太平御覽』など類書に引用されている『搜神記』逸文を集め、部分的に残されていた原書を補うようにして再編されたものではなからうか。

(四) 巻数・見出しのタイトル・話数は『搜神記』(平凡社)に、中国語の見出しのタイトルは『搜神記』(中国画報出版社)による。項目「いぬ」の部分の用語は、使用例と使用回数を表す。

#### 参考文献

- 『搜神記』 竹田晃訳 平凡社 一九七九年
- 『干寶 搜神記』 森野繁夫・先坊幸子編 白帝社 二〇〇四年
- 『漢書』 小竹武夫訳 筑摩書房 一九七七年
- 『晉書』 汲古書院 一九七一年
- 『史記』 吉田賢抗 明治書院 一九八二年
- 『莊子』 金谷治訳注 岩波書店 一九八三年
- 『新釈漢文大系 周易 上』 今井宇三郎 明治書院 一九八七年
- 『中国の説話と古小説』 竹田晃 放送大学教育振興会 一九九二年
- 『風俗通義』 中村璋八・清水浩子 明德出版 二〇〇二年
- 『中国古小説の展開』 富永一登 研文出版 二〇一三年

『搜神記』の中のどうぶつ

『搜神記』 马银琴・周广荣译注 中华书局 二〇〇九年

『搜神記』 语言研究』 周生亚著 中国人民大学出版社 二〇〇七年

『搜神記』 张桐编辑 中国画报出版社 二〇一三年

(二〇一四年十二月十五日受理、十二月十八日採扱)